



東 末久さん(左)
総合グローバル学部 総合グローバル学科2年生
以前は、世界の出来事や経済の動きなど、新聞やニュースから得られる一方的な情報をうのみにしていました。市民社会論概説を含めて、多くの科目で異なる視点から社会的な事象について話をうかがうことができるのが学科の魅力。ニュースを見る際の視点が変わりました。

学生に聞きました！
講義・大学・将来の夢



黄 穎莉さん(中)
総合グローバル学部 総合グローバル学科2年生
稲葉先生の講義を通して、国際政治や市民社会の成り立ちについて、さまざまな切り口から考えられるようになりました。これからは学科での学びを通して、世界を多角的に見ることができる幅広い視野を養い、将来は国際協力の分野で仕事ができるように頑張りたいと思います。

深井 葉さん(右)
総合グローバル学部 総合グローバル学科2年生
市民社会論という漠然としたイメージがありますが、稲葉先生の授業は具体例から入るのでイメージしやすいです。今日の講義もメキシコの反グローバル化運動から、グローバル化とは何か、それが市民社会にもたらす影響はどうふうに、体系的にとらえることができ勉強になりました。

上智大学

<http://www.sophia.ac.jp>
上智大学四谷キャンパス
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学入学センター 03-3238-3167

神学部

文学部

総合人間科学部

法学部

経済学部

外国語学部

総合グローバル学部

国際教養学部

理工学部

【沿革・歴史】

- 1911年(明治44年) 財団法人上智学院設立。
- 1913年(大正2年) 専門学校令により上智大学(哲学科、独逸文学科、商科)開設。
- 1928年(昭和3年) 大学令による上智大学(文学部・哲学科、文学科、商業部・商学科)開設。
- 1955年(昭和30年) 文学部に外国語学科(英語、ドイツ語、フランス語、イスパニア語各専攻)増設。
- 1957年(昭和32年) 法学部(法律学科)開設。
- 1958年(昭和33年) 神学部(神学科)開設。外国語学部(英語学科、ドイツ語学科、フランス語学科、イスパニア語学科、ロシア語学科)開設。したがって文学部外国語学科は廃止。
- 1962年(昭和37年) 理工学部(機械工学科、電気・電子工学科、物理学科、化学科)開設。
- 1965年(昭和40年) 理工学部に数学科増設。化学科に化学専攻、応用化学専攻設置。
- 1976年(昭和51年) 文学部に心理学科、社会福祉学科を増設。したがって教育学科心理学専攻、社会科学社会福祉学専攻は廃止。
- 1977年(昭和52年) 外国語学部日本語・日本文化学科を外国語学部比較文化学科に名称変更。
- 1987年(昭和62年) 比較文化学科(比較文化学科、日本語・日本文化学科)開設。
- 2005年(平成17年) 文学部(教育学科、心理学科、社会科学、社会福祉学科)を総合人間科学部(教育学科、心理学科、社会科学、社会福祉学科)に改組。
- 2008年(平成20年) 理工学部(機械工学科、電気・電子工学科、数学科、物理学科、化学科)を理工学部(物質生命理工学科、機能創造理工学科、情報理工学科)に改組。

イベント情報

○オープンキャンパス

7月31日(日) 10:00～16:00

神・文・総合人間科・法・経済・理工学部

8月1日(月) 10:00～16:00

文・法・経済・外国語・総合グローバル・国際教養学部

8月2日(火) 10:00～16:00

神・総合人間科・外国語・総合グローバル・国際教養・理工学部

※詳細は大学 Web ページをご覧ください。

取材担当記者より
上智大学、
こんな大学でした！

17時スタートの講義でしたが、約200席の講義室はほぼ満席で、講義への期待の高さと学生たちの熱意が伝わってきました。講義は先生の一方的な説明に終わらず、課題を与えたり、学生を指名して考えを述べさせたり、緊張感を持続させる配慮が素晴らしいです。都心のキャンパスらしく見晴らしの良い、清潔感あふれる校舎も印象的でした。

先生のご紹介

い な ば な な こ
稲葉 奈々子先生

東京外国語大学外国語学部フランス語学科卒業、東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退。茨城大学人文学部准教授、東京大学教養学部非常勤講師、フェリス学院大学国際交流学部非常勤講師などを経て現職。共著に『国境を越えるー在日ムスリム移民の社会学』(青弓社)がある。グローバルイゼーションが市民社会や社会運動に及ぼした影響をフィールドワークにより実証的に研究している。

支援のためにチアパスへ向かい、インターネットでは支援者がマルコスの言葉を世界中に発信した。稲葉先生はサパティスタの旗やメキシコで購入したマルコス人形などをモニターに映し、人々の熱狂ぶりを伝える。実は足運びを運ぶフィールドワークを重ねてきた社会学のエキスパートならではの臨場感あふれる講義に、学生たちは引き込まれていく。

人々の生き方を
経済的な尺度で測ることはできない

稲葉先生はサパティスタが正義で、新自由主義は悪であるという二元論はとらない。日本の

貿易自由化やTPPの議論を例に挙げながら、市場経済の中で生まれる競争がイノベーションを起こし、人々の生活を豊かにすることもあると説く。公平な取引に基づいて作られたフェアトレード商品の価格が高く、一般の商品に比べて競争力が低いことも隠さない。

ならばメキシコの先住民も、先進国のように生産性を上げればいいのか。

「サパティスタが支持されたのは、人々の存在価値まで経済的な指標で測るのはおかしいという主張が説得力を持つ

たからにほかなりません。これからの市民社会のあり方を考えるうえで、サパティスタの活動は多くの示唆を与えてくれます」と先生は強調する。

今回はグローバル化に抗してマクドナルドを解体したフランスの農民運動を通して、市民社会と経済の関係について考える。



上智大学

総合グローバル学部 総合グローバル学科

5.9.Mon. at Yotsuya
17:00~18:30

本日の講義 市民社会論概説

講義の流れ

東欧の革命や南米の社会運動などを題材に市民社会論の基礎を身につけ、社会と国家の関係、社会におけるマイノリティの位置付けなどを学ぶ。最後にフィールドワークに取り組み、レポートを提出。

醍醐味

実際の社会運動やNPOの取り組み事例を通して、市民社会が迫られている変容を知ることができる。一見、普通の考え方だと思っていた市民社会の営みや世界に対する見方が、実は欧米の政治文化に大きく影響されていたことに気づかされることも多い。

グローバル化に抑圧された 名もなき人々が立ち上がる

アメリカ・カナダ・メキシコ3カ国の貿易自由化について定めたNAFTA(北米自由貿易協定)が開始した1994年1月1日。メキシコ最南部のチアパス州で、同国の主食であるトウモロコシ国内に輸入され

ば、零細農家である先住民は太刀打ちできない。NAFTAの締結は「死刑宣告」に等しいというのが彼らの主張であった……。

を、学生たちは食い入るように見つめている。グローバル化によって市民社会がどのように変わりつつあるのかを学ぶ稲葉奈々子先生の「市民社会論概説」。今日の講義は経済至上主義に異議を唱えたメキシコの社会運動がテーマである。サパティスタのリーダーはマルコス副司令

官。「真のリーダーは経済的に抑圧されたすべての人々」という考えからあえて「副司令官」を称した。メンバー全員が顔を隠しているのは、経済至上主義が蔓延する世界において、経済的価値がないとみなされた名もなき人々の代弁者であるという意味が込められている。

人間の存在価値は経済指標で測れない！ 新自由主義に反旗を翻した戦士たち

「新自由主義」は、本当に自由なのか

国家や市民社会は本来、経済価値とは異なる論理で動く。国家には、家庭の経済力にかかわらず最低限の教育や医療を保障する責任がある。市民社会は労働者だけで構成されているわけではなく、専業主婦や老人、学生もいる。しかし1990年代以降のグローバル化によって

市場経済の論理が支配的になると、国家や市民社会も経済的な価値観に左右されるようになった。この思想は「新自由主義」と呼ばれ、経済的に有用ではない存在は価値がないと考える風潮が蔓延していく。これを受けて、左翼政権の多い中南米を中心に、新自由主義に異

議申し立てをする反グローバル化運動が盛んになる。その中でもっとも影響力を持ったのがサパティスタだった。彼らは武装こそしていたものの、活動は州都でデモを行う程度で、実際に武器を使うことはなかった。その主張は人々に支持され、世界中からNGOやボランティアが